

後ろ向きな自己規定に縛られるな 自分の可能性は自分でも分からぬ 未決定状態こそ邁進する力となる



永田 和宏

一步先のあなたへ

24 自己評価という落とし穴

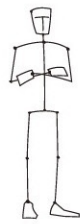
職業柄、学生と接する機会が多い。楽しいことも多いが、時おりもつ少しおおらかに生きてよと、切なくなることもある。それは「私など何でもできる」といった強い自己規定が垣間見えることによる。自己評価の値を下げている。じれったい。彼



炎

安易な、そして消極的な自己規定、自己評価から自由であり続けること。自分を評価しようとしていないで、敢えて自分を宙づり状態の不安のなかに置き続けること。そんな「未決定状態」こそが、何かのきっかけがあったとき、一気にその何かに邁進する推進力となるのである。「自分はまあそこそこだから」という自己規定からは、そのような推進力は生まれない。自分の可能性は、自分ですらまだ知らないものなのだ、いつもいつも思っていて欲しいのである。(おわり)

客観的な基準を欠いては評価そのものが成立しないから、ある一つの均一の断面で誰をも切り取ろうとするのが評価の視線であり、きわめて限定的なある断面に投射された影が評価という数字に変換されるのである。試験を含めたすべての評価は、〈現在および近過去〉だけを評価するものであり、それ以上のもではないという点がいま一度確認しておきたいところだ。評価とは、常に現在の、



評価というものは、良ければ自信をもつてさらに励み、悪ければ、それを分析して克服できるように対策を練る、そういう使われ方をした場合にのみ意味を持つ。ところが、評価そのものが自己目的化してしまい、評価を生かすのではなく、それに縛られてしまうという場合のほ



うが圧倒的に多いように見られる。「私はまあこの程度の

らはいつ頃から自己評価という習慣を教え込まれるのだろう。「〇〇ちゃんを見てごらんなきい。それに較べてあなたは」などと言われ続けると、いやでも他との比較のなかでしか自分を見られないようになるものだ。自分を客観的に見るのは悪いことではない。しかし、それがいつも誰かとの比較であったり、合格ラインからの距離としてしか意識されていないとしたら、ひたすら後ろ向きのそんな自己規定は、自らの可能性をあらかじめ封印無化するという点で害こそなれ、益するところは何もない。

しかもある側面だけに焦点をあてたきわめて限定的なものである。ところが、その限定的な評価が一人歩きを始めると、あなたも個人の全体であるかのようなオーラを持ち始める。さらに、その限定的な「現在の」評価は、そのまま未来へ投射され、未来を規定する大きな要因となりやすい。未来は現在に依存はするが、地続きではない。現在が未来を規定し、限定することがあるとしたら、その要因は、自分の力はこれくらいのものだからという萎縮した自己規定以外のものではない。

ものでございます」といった値札をぶら下げて歩いていくかのような若者が多すぎるのだ。第三者による評価なら、それは他人が勝手にやっているのだから、俺には関係ないよと突き放しておくこともできる。だが自己評価となると、自分で下した評価なのだから、どうしてもそれに縛られざるを得なくなる。そんな余計な縛りは何の意味もない。自分をどこかにピン止めして位置づけておけば安心ではある。しかしその安心は、往々にして「そこそこいいか」という消極性にスライドしてしまいやすいし、高望みしても無理だという諦めに結びつきやすい。評価なんて知ったことか、やりたい奴にはやらせておけ、くらいの気概を持って自分を敢えて位置づけないこと。それは確かに不安ではあるが、安易な自己規定からは決して開くことのできない、未来の可能性を押し開くものでもあると思うのである。

京都産業大教授(細胞生物学)、歌人

※コラムへの感想をメールでお寄せください。minna@mb.kyoto-np.co.jp